

ナイチンゲール

Florence Nightingale

ナイチンゲール看護研究所主任研究員

金井一薫

今、ナイチンゲールの看護論が新しい

 ナイチンゲールは近代看護を確立したといわれていますね。

金井 確かにナイチンゲールは、「看護」の機能の発見者であり、看護の新しい時代の幕開けをしました。

けれども、知ってほしいことは、「近代看護の確立」という有名な“キャッチフレーズ”と、ランプをもつ天使とか犠牲の精神とかいうような、なかば神話化されたイメージだけが先行してしまっていて、それでみんなナイチンゲールのことがわかったつもりになって

いることです。誰もが知っているつもりでいるナイチンゲールですが、実は今まで多くの人は、本当には理解していなかったといっているのです。

というのは、彼女の業績は一定程度は評価されているのですが、彼女の看護論、看護思想は、これまできちんと研究されなかったからです。したがって彼女の看護論の真意は、明らかにされてこなかったといっているでしょう。ナイチンゲールの看護思想の研究はようやく始まったばかりなのですから、彼女の看護論は、今、新しいといえるのです。

看護を専門的な職業として確立

 では、まずナイチンゲールの業績を教えてください。

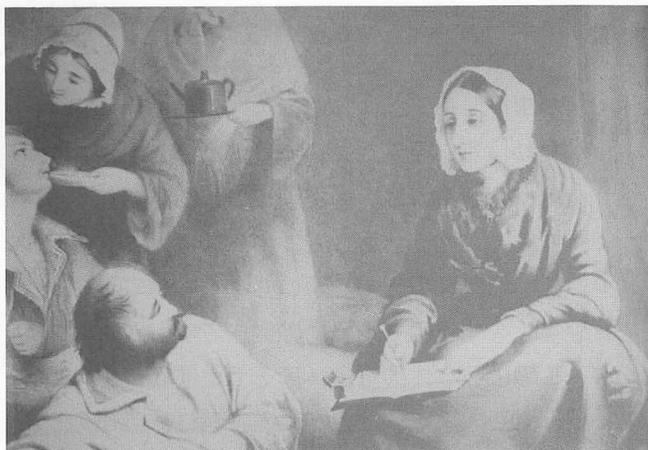
金井 一般に、ナイチンゲールの業績を評価するとき、1番目に看護をひとつの職業として確立したこと、2番目に看護教育のシステムをつくったことがあげられます。その裏には、次のような事情があったことを忘れてはなりません。

19世紀のイギリスにおける病院は、極貧にあえぐ人々が病気になったときに収容される施設で、不衛生でした。そして看護婦といわれる人も、同様に貧しく、何の知識も技術ももっていませんでした。だから上流家庭に育ったナイチンゲールが看護婦になりたいといったとき、周囲からは大反対されたのです。

長い失意の時代を経て、ついに看護婦になったナイチンゲールは、新しい発想で、自ら

▼クリミア戦争前





▲クリミア戦争で看護にあたる

の看護の理念を実現していきました。そしてクリミア戦争での功績が、広く人々に知られることになったのです。

ナイチンゲールが臨床の現場にいたのは約3年間だけで、残りの生涯は、病院の改善や看護婦の養成、国民全体の健康増進のために費やしました。表舞台に立つことはありませんでしたが、行政に働きかけ、また膨大な著作を著したのです。

ナイチンゲールは、それまで社会の底辺の人々が行なってきた看護に光をあてたのです。看護は専門的な職業だとし、教育を受けた専門的な人々が看護を行なうようなシステムをつくったのです。このことは社会に大きな影響を与えました。ナイチンゲールの存在そのものが看護を支えてきたといえるほどです。

こういった業績を残すことができたのも、ナイチンゲールが確固とした看護の思想をもっていたからこそです。この思想は、ナイチンゲールが自ら発見したものなのです。

『看護覚え書』は看護の原点

 ナイチンゲールの代表的な著作は『看護覚え書』ですね？



▲クリミアから帰国した直後

金井 私は、ナイチンゲールの残した最も大きな業績は、『看護覚え書』を書いたことだと考えています。

なぜならそれが、世界で初めて「看護とは何か」を文章として明らかにしたものだからです。そしてこの看護の定義によって明らかにされた内容こそ、看護の原点であり、本質なのです。それは時代や国を越えて、永遠に引き継がれていくものなのです。『看護覚え書』を理解せずに、ナイチンゲールを理解したことにはなりません。

『看護覚え書』を古くさいと考える人もいます。この本が、1859年当時の生活実態に即して看護を語っているからでしょう。しかし、時代や生活環境が違ってても、本質的なことは変わらないと読みとるべきなのです。



▲自室で仕事に取り組む

病気は、体のなかで 自然の治癒力が働いている姿

 では、ナイチンゲールの「看護の定義」とは、どういうものですか？

金井 看護とは何かがわかるためには、まず「病気」を看護の目で見つめなければなりません。ナイチンゲールは、『看護覚え書』のなかで、看護の知識は「医学知識とははっきり区別されるものである」と述べています。病気を医師の見方でなく、看護の視点で見る必要があるのです。

だからまず「病気とは何か」を理解しなければなりません。そして看護的に症状や病気を読んでいくのです。

ナイチンゲールは、病気を次のように定義しています。「すべての病気は、その経過のどの時期をとっても、程度の差こそあれ、その性質は回復過程であって、必ずしも苦痛を伴うものではないのである。つまり病気とは、毒されたり衰えたりする過程を癒そうとする自然の努力の現れであり、——(中略)——そ

のときどきの結果として現れたのが、病気という現象なのである」

つまり、病気とは、体のなかで自然治癒力が発動している姿だといっているのです。

たとえば鼻水は、鼻粘膜についた病原体や異物を洗い流そうとして、自然の治癒力が働いている姿なのです。悪いものを食べて下痢や嘔吐をするのも同じ力の働きです。

このような体の働き、「癒そうとする自然の試み」を大事にしたとき、看護者は「自然の試みを援助しなければならない」と、ナイチンゲールは述べています。

この言葉はこう解釈できます。

症状や病気は、その人の生活を制限するものです。たとえば発熱したら安静にしなければならぬし、骨折したら動けない。このように生活が制限されたことに対して働きかけること、すなわち生活をその人に代わって援助することが看護である、と。

患者を最もよい状態におけるよう、 生活の援助をするのが看護

金井 では、看護の定義に移りましょう。次の2点をあげることができます。

第1に、ナイチンゲールは「看護がなすべきこと、それは自然が患者に働きかけるのに、最もよい状態に患者をおくことである」といっています。いいかえると、病気の順調な回復過程が進むように、患者の周辺に最もよい状態をつくるのが看護だ、ということです。

先ほど述べたように、病気による生活の制限を補っていくのが看護なのです。たとえば自分では食べられない人には食べさせてあげるとか。つまり生活の援助であり、生活を整えることなのです。医師の治療を介助するのが看護の本質ではないのです。

以上のことを、より具体的にいったものが第2の定義です。

「看護とは、新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさを適切に保ち、食事を適切に選択し管理すること——こういったことのすべてを、患者の生命力の消耗を最小にするように整えることを意味すべきである」

先に述べたように、ナイチンゲールは「そのときどきの(生活の)結果として現れたものが、病気という現象」といっています。これは、いいかえると、体にはそのときそのときの生活が反映されるということなのです。つまり、生活が乱れていると、それが病気となって現れるということです。

この生活の乱れを、そのときどきの患者の力に応じて整えていくのが看護なのです。患者に力があれば、患者自らが生活を立て直していけますが、その力がないとき、あるべき生活を患者の周りにつくりだしていくのが看護です。

このように、生活をつくり直していくことをとおして、症状が順調に回復していくのを助けること。それが、ナイチンゲールのいう本来の看護なのです。

「看護とは何か」について 私たちは共通の視点をもつべき

 ナイチンゲールを、今なぜ学ぶべきなのでしょう？

金井 ナイチンゲールは、『看護覚え書』の「はじめに」で次のように述べています。

「私はまず“看護”という言葉の意味するところに関して、われわれは当然同じ理解をもっていると思いたい」



▲晩年、ナイチンゲール看護学校の生徒たちと

これは私も強調したいことです。看護の視点は、看護職みんなが同じでなければならぬと思います。

各人の仕事の役割分担は、仕事をスムーズに進めていくうえで大事なことです。しかし「看護とは何か」について、看護職は共通の理解をもつべきだと思います。

現在は、看護職はそれぞれ個人の看護観をもっているべきだと考えられています。しかし、個々の看護観のスタート地点、土台は共通のものであるべきです。そうでなければ臨床は混乱するし、これから発展していく看護の方向を見失ってしまうでしょう。基本となる看護の視点を共有化し、それを状況によって各自発展させてゆけばよいのです。

ナイチンゲールの思想は、看護の土台そのものです。これを学べば、自分たちが何をすればよいかはわかるのです。

彼女の業績をイメージだけでほめたたえるのではなく、思想家ナイチンゲールのものの見方を知って臨床に生かす。これが今、現代の私たちがナイチンゲールを学ぶ理由です。